外国人留学生の適応に関する予備調査

○田中 希穂

(大阪大学基礎工学研究科)

キーワード: 留学生, 適応, 満足感

Preliminary Study of International Students' Adaptation

Kiho Tanaka

(Graduate School of Engineer Science, Osaka University)

Key Words: International Students, Adaptation, Life Satisfaction

目 的

我が国の留学生数は増加の一途をたどっている。高等教育機関におけるこのような留学生の増加に伴い、彼らの学業的成功、健康、心理的適応は、留学生のみならず、受け入れる大学にとっても重要な問題である。私費外国人留学生実態調査(JASSO, 2013)において、8割の留学生が日本に留学した全体的な印象について「良かった」と回答している一方、留学中におけるさまざまな苦勞も報告されている。特に、「物価が高い」、「日本語の習得」、「日本生活における母国の習慣との違い」、「宿舎を探すこと」などの項目で苦勞していると感じている留学生が多かった。これらの項目は日常生活に直結するものであり、彼らが経験している日々のストレスも高いことが想像される。一方で、これら以外にも留学生の適応を左右する諸問題として、学業領域ではドロップアウトや指導教官や研究室でのトラブル、対人関係領域ではアイデンティティの問題やミスコミュニケーションが指摘され、それらがメンタルヘルスにおよぼす影響も注目されている。このような現状にも関わらず、高等教育機関の支援体制の整備が遅れている傾向にあることも同時に事実である。そこで、外国人留学生が母国を離れ、日本という新たな環境で生活し、学業的目標を達成するためには、彼らの適応を促進する環境を整備することが大切となる。

留学生の適応に関する研究では、これまで特にコミュニケーション関連の要因が注目されてきた。つまり、留学生の日本社会への適応を考えると、日本人との人間関係が何よりも重要な役割を果たし、日本人と十分かつ適当なコミュニケーションが可能となることによって、適応が促進され、滞在生活が安定することが指摘されている(孫, 2009)。また、佐藤(1996)は、滞在期間が長く、日本語能力が高いと、適応が促進されると指摘している。つまり、日本滞在期間が長くなるほど、日本語によるコミュニケーションが円滑に行えるようになり、その結果、日本での適応が促進されると考えられる。しかし、一方で、海外滞在経験と日本語能力は、異文化適応とネガティブに関連するとの指摘もあり(岩崎, 1998)、滞在期間と適応との関連は一貫した結果を得られていない。

そこで本研究では、留学生の留学形態と適応との関連を調査し、滞在期間の違いが適応に及ぼす影響について、予備調査的に検討することを目的とする。

方 法

参加者: 日本の大学に在籍している外国人留学生 181 名(男性 83 名, 女性 98 名)が調査に参加し、そのうち正規留学生 71 名, 短期留学生 101 名を分析対象とした。出身地域は、中国(34.3%), 欧米諸国(30.8%), その他の国(34.9%)であった。また、64.5%の学生が、何らかの奨学金の給付を受けていた。

調査方法: Web によるアンケート調査を作成し、各大学の留学生担当者に学生

への回答依頼をお願いした。すべての項目は日英併記で、回答は選択式あるいは自由回答式であった。所要時間は 10 分程度であり、無記名で実施された。

尺度: 留学生の日本での日々の生活への適応状態を測定するために、加藤(2004)を参考に日本での生活に対する適応の程度を測定する 14 項目を作成し、6 件法で回答を求めた。因子分析の結果、2 項目を分析から除外し、「日本の環境への適応($\alpha=.73$)」「日本人の特性への適応($\alpha=.60$)」「学業・研究への適応($\alpha=.66$)」の 3 因子を抽出した。

留学生の適応について精神的側面からも把握するため、主観的ウェルビーイングの認知的側面を測定するとされる満足感(Diener et al., 1985)の 5 項目と、情動的側面を測定するとされるバイタリティ(Ryan & Frederick, 1997)の 7 項目を用い、6 件法で回答を求めた。因子分析を行った結果、一因子構造が確認され、それぞれの α 係数は、満足感尺度が.80、バイタリティ尺度が.87であった。

結 果 と 考 察

日常生活における適応の程度と満足感やバイタリティの関連を検討するために、相関係数を算出した。その結果、全体的に短期留学生よりも正規留学生の方がやや強い相関を示す傾向にあった。特に「日本の環境への適応」・「学業・研究への適応」と「満足感」の関連(正規留学生 $r=.36$, .42 ($p<.01$, .001); 短期留学生 $r=.28$, .23 ($p<.01$, .05)), 「日本人の特性への適応」と「バイタリティ」の関連(正規留学生 $r=.37$ ($p<.05$); 短期留学生 $r=.25$ ($p<.05$))は、正規留学生の方が短期留学生よりも強かった。正規留学生では、日本での生活適応と心理的適応がより密接に関連していることが示唆された。

引用文献

- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985.) The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-785.
加藤清方(2004.) 日韓共同理工系学部留学生の日本留学意識と日本語学習心理に関する基礎研究 科学研究費(基盤研究 C)報告書 東京学芸大学
Ryan, R. M., & Frederick, C. M. (1997.) On energy, personality and health: Subjective vitality as a dynamic reflection of well-being. *Journal of Personality*, 65, 529-565.

	日本の環境への適応		日本人の特性への適応		学業・研究への適応		満足感	
	正規留学生	短期留学生	正規留学生	短期留学生	正規留学生	短期留学生	正規留学生	短期留学生
日本の環境への適応	—	—						
日本人の特性への適応	.40 ***	.31 **	—	—				
学業・研究への適応	.28 **	.31 **	.53 ***	.13	—	—		
満足感	.28 **	.37 **	.21 *	.26 *	.23 *	.42 ***	—	—
バイタリティ	.24 *	.31 **	.25 *	.37 **	.12	.24 *	.62 ***	.77 ***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$